

博士学位論文審査要旨

2019年12月26日

論文題目： 児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入

学位申請者： 岸田 広平

審査委員：

主査：	心理学研究科	教授	石川 信一
副査：	心理学研究科	教授	杉若 弘子
副査：	関西学院大学文学部	教授	佐藤 寛

要 旨：

児童の不安症と抑うつ障害はともに有病率が高く、併存して発生することが多い心理的問題である。児童の不安症については認知行動療法の有効性が示されているが、青年期以前の抑うつ障害については有効性の実証された心理療法は確立されていない。不安症と抑うつ障害の併発率の高さを考慮すると、複数の精神疾患や心理社会的問題を扱う診断横断的介入の有用性が指摘できる。そこで、本論文では児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入に関する基礎研究と効果研究を実施した。

第1章では児童に対する実証に基づく心理療法の展望が行われた。その中で、複数の作用機序を効率的に扱うことのできる倏約化されたプログラムの開発の必要性が指摘された。そのためには、症状の作用機序を同定するための基礎研究の重要性、さらには基礎研究を実現するための測定尺度の開発の必要性が論じられた。これらの問題点を踏まえ、本論文で検討すべき課題が第2章で示された。

第3章では子ども用回避行動尺度（Children's Avoidance Behavior Scale: CABS）の作成を行った。495名を対象にした調査の結果、CABSの信頼性と妥当性が確認され、片方の症状を統制した偏相関分析の結果、児童の回避行動は不安症状と抑うつ症状の両方に影響を与えうることが示された。第4章では子ども用快活動尺度（Children's Pleasant Activity Scale: CPAS）の作成を行った。331名を対象にした調査の結果、CPASの信頼性と妥当性が確認された。第3章と同様の偏相関分析を行ったところ、児童の快活動は抑うつ症状に対してのみ影響を与えることが示された。

第5章では、診断横断的介入プログラム（Avoidance Behavior-focused Transdiagnostic Intervention Program: ATP）を開発し、ATPの実施可能性と予備的な有効性の検討を行った。8名を対象とした分析の結果、ATPの脱落率は0%であり、臨床家評定の診断面接における主診断の重症度や診断数、自己評定の不安症状が改善することが示された。加えて、不安の馴化の指標である自覚的障害尺度（Subjective Units of Distress: SUD）は、不安症と抑うつ障害を示す事例のいずれにも利用可能であることが確認された。

第6章では、パイロットランダム化比較試験を用いて ATPの有効性と作用機序の検討を行った。不安症または抑うつ障害を有する16名を対象とした分析の結果、診断面接による診断数、および自己評定と親評定の抑うつ症状に対する有効性が示された。次に、本論文で作成された2つの尺度、およびSUDを用いて作用機序について分析した結果、SUDの変化は不安症状の改善と関連があることが示されたものの、CABSやCPASの変化は不安症状や抑うつ症状の変化とは関連を示さなかった。一方、想定した作用機序ではないものの、CPASで測定される快活動の増

加が診断の改善に対する作用機序となる可能性が示された。以上の結果を踏まえ、第7章では本論文の意義と臨床的示唆、および今後の課題が議論された。

本論文は、基礎研究と効果研究の両側面から不安症や抑うつ障害を有する児童に対する診断横断的介入に関する実証的な研究を行っており、臨床児童心理学分野の更なる発展に寄与する成果であると評価できる。

よって、本論文は、博士（心理学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2019年12月26日

論文題目： 児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入

学位申請者： 岸田 広平

審査委員：

主 査： 心理学研究科 教授 石川 信一

副 査： 心理学研究科 教授 杉若 弘子

副 査： 関西学院大学文学部 教授 佐藤 寛

要 旨：

上記審査委員3名は、2019年12月26日14時から約2時間にわたり、学位申請者に面接試験を実施した。提出された論文に対する質疑に対して、適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的な価値が確認された。また、臨床心理学はもとより、心理学全般についても十分な学力を有することが確認された。引き続き行った語学試験（英語）においても十分な語学力を有することが確認された。

以上より、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入
氏 名： 岸田 広平

要 旨：

本博士論文では、児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入に関する実証的研究を行った。第1章の序論では、児童青年の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入に関する先行研究の動向が示された。まず、児童青年の不安症や抑うつ障害に対する実証に基づく心理療法の紹介され、児童の抑うつ障害にはさらなる実証的研究が必要であるものの、児童青年の不安症や青年の抑うつ障害については有効な心理療法の知見が蓄積されていることが示された。次に、児童青年の不安症と青年の抑うつ障害に対する実証に基づく心理療法において、共通して含まれている心理療法として認知行動療法の存在が指摘された。さらに、児童青年の不安症や抑うつ障害に対する認知行動療法プログラムに含まれる主な介入技法に関する議論がなされた。次に、統制された研究場面において機能するかという有効性、および、現実の臨床場面において機能するかという有用性に関する議論がなされた。実証に基づく心理療法のような単一の精神疾患や心理社会的問題を扱う疾患特異的介入は有効性に関する非常に有益な情報を提供しているものの、有用性に関する課題が指摘できる。そこで、複数の精神疾患や心理社会的問題を扱う診断横断的介入が紹介され、児童青年の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入に関する先行研究が展望された。以上を踏まえて、児童青年の不安症と抑うつ障害に対する有効性と有用性を兼ね備えた短期的介入として、「回避行動の減少」「快活動の増加」「不安の馴化」という複数の作用機序に焦点化した診断横断的介入が有益な選択肢となる可能性が示された。次に、国内外の児童青年の不安症と抑うつ障害の機能障害と作用機序に関する先行研究について概観した結果、診断横断的な機能障害や作用機序に関する実証的研究の不足が指摘された。さらに、診断横断的介入において重要な機能障害や作用機序となる回避行動については実証的研究がほとんど存在しないことが示された。最後に、診断横断的または疾患特異的な機能障害や作用機序を説明する媒介変数を測定するためのプロセス指標として、回避行動、快活動、自覚的障害度に関する先行研究が展望され、各プロセス指標における解決すべき課題が示された。以上を踏まえて、第2章では、児童青年の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入における先行研究の問題点を踏まえて検討すべき課題が示され、本論文を実施することの意義が示された。

第3章の観察研究では、子ども用回避行動尺度 (Children's Avoidance Behavior Scale: CABS) を作成し、信頼性と妥当性の検討を行った。CABSは、不安や抑うつを喚起する場면을提示し、その場面に対する回避行動を測定する尺度であり、(a) 不安/抑うつ領域、(b) 社会/非社会領域、(c) 認知/行動領域、(d) 能動/受動領域の4次元16領域の包括的な回避行動を測定している。児童495名を対象とした検討の結果、CABSは信頼性と妥当性を有する尺度であることが、一部の指標により支持された。さらに、児童の回避行動は不安症状と抑うつ症状に対する診断横断的な機能障害であることが示された。

第4章の観察研究では、子ども用快活動尺度 (Children's Pleasant Activity Scale: CPAS) を作成し、信頼性と妥当性の検討を行った。CPASは、日常生活場面に関連する快活動を測定する尺度であり、(a) 臨床適用可能性、(b) 理解可能な具体性、(c) 特有の活動内容、(d) 介入ターゲット、という4点を反映している。児童331名を対象とした検討の結果、CPASは信頼性と妥当性を有する尺度であることが、一部の指標により支持された。さらに、児童の快活動は抑うつ症状に対する疾患特異的な機能障害であることが示された。

第5章の介入研究では、児童青年の不安症と抑うつ障害に対する回避行動に焦点化した診断横断的介入プログラム (Avoidance Behavior-focused Transdiagnostic Intervention Program: ATP) を開発し、Proof of concept (POC) 試験を用いて実施可能性と有効性の検討を行った。ATP は「回避行動の減少」「快活動の増加」「不安の馴化」という複数の作用機序に焦点化した診断横断的介入プログラムである。不安症や抑うつ障害を有する児童青年8名に対する POC 試験の結果、介入前後の脱落率が0%であり、実施可能性の高さが示された。有効性の検討の結果、主要効果指標である臨床家評定の診断面接における主診断の重症度や診断の数が改善することが示され、副次効果指標である自己評定の不安症状が改善することが示された。加えて、不安の馴化の指標として、診断横断的介入における自覚的障害尺度 (Subjective Units of Distress: SUD) の利用可能性を検討した結果、主診断に関係なく、すべての児童青年において SUD の報告が可能であり、診断横断的介入における SUD の利用可能性が確認された。

第6章の介入研究では、待機群と独立評定者を設定したパイロットランダム化比較試験を用いて、児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入プログラムである ATP の有効性と作用機序の検討を行った。不安症や抑うつ障害を有する児童16名に対するパイロットランダム化比較試験の結果、有効性については、複数の評価者 (臨床家、親、子ども) と多面的な領域 (診断、症状、全般困難、プロセス) における査定を用いて検討した。有効性の検討の結果、ATP 実施後において、主要効果指標である診断面接による診断の数の改善が示され、副次効果指標である自己評定と親評定の抑うつ症状の改善が示された。次に、作用機序については、子ども用回避行動尺度 (第3章)、子ども用快活動尺度 (第4章)、不安の馴化を測定するための自覚的障害尺度 (第5章) を用いて検討した。その結果、自覚的障害度は不安症状に対する疾患特異的な媒介変数となることが再現された。一方、回避行動や快活動は、不安症状や抑うつ症状に対する診断横断的または疾患特異的な媒介変数としては示されなかった。加えて、想定した作用機序ではないものの、快活動が診断に対する媒介変数となる可能性が示された。

第7章の総合考察では、本論文で実施した実証的研究に基づいて、本論文の意義 (多くの対象者に対する直接的な恩恵、短期的介入のための具体的方法の提案、児童青年の抑うつ障害に対する示唆)、本論文の臨床的示唆 (診断横断的介入における有用性、回避行動の全般性と具体性、快活動における対人相互作用行動、不安のセッション内馴化、診断横断的介入における調整変数)、本論文の学術的貢献 (診断横断的介入における主要効果指標、回避行動の下位分類、快活動と不安症状、不安の馴化と消去)、および、本論文の限界と今後の課題 (有効性の確立、有用性の実証的研究、プロセス指標の洗練化と作用機序の解明、適用範囲の拡張可能性) について述べた。

本論文では、有効性と有用性を兼ね備えた短期的介入として、本邦初の児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入に対するランダム化比較試験を実施した。児童青年の不安症や抑うつ障害に対する実証的研究が非常に少ない本邦の現状を踏まえると、本論文で実施した実証的研究は、研究的にも臨床的にも大きな意義がある。本論文には先述のような限界と課題が指摘できるものの、それらの限界や課題を解決していくための足掛かりとなるものが本論文で実施した実証的研究である。将来的には、本論文を足掛かりに、不安症や抑うつ障害を有する児童青年やそれに伴う心理社会的問題を抱える児童青年にとって、有効性と有用性を兼ね備えた有益な支援が社会に普及し、実装されていくことが期待される。